



フリーターはなぜ生まれたか

橋爪大三郎

不安定で給料も安いのに、なぜ人はフリーターになるのだろうか？
フリーター増加の裏には、社会の変化があったのだ。

四つくらい段階を踏んで話していいかな？
まず、フリーターの特徴は「雇用常ならず」だ。
な。「雇用無常」だ。

次に、給料が低い。フリーターより低い給料
ってある？ パートくらいだな。フリーターよ
りも安い労働カテゴリーがあれば、雇い主はそ
ういう人を雇うから、フリーターは雇わない。
ゆえに定義上、一番安い。まあごく短期の場合
は危険手当の意味もあって、少し高いかもしれ
ないけれども。

「雇用常ならず」そして「給料が安い」。踏ん
だり蹴ったりだ。こんなものをなぜやるかとい
うと、これをせざるをえない、あるいはこれを
やりたいという事情があって、それで新しいジ
ヤナルの労働として生まれてきたんだろう。そ
れはなぜなのかというあたりを掘り下げてみた
い。

「簡単な仕事は給料が安い」のが 近代社会の原則

まずは大きく出ますが、近代社会、われわれ
の生きている資本主義社会の、雇用、労働、給
与などの原理・原則を考えてみる。
資本主義経済の労働と報酬の関係を考えてみ

ると、給料は不平等でいいんです。「同一労働・同一賃金」と言うでしょう。同じ働きをし
たら誰でも同じように給料がもらえる。裏を返
すと「異なる労働・異なる賃金」なんです。よ
うんと働いた人や、高級な労働をした人はたく
さん給料をもらって、そうでない人たちはちょ
っとしかもらえない。それが正しい、という考
え方なんです。

たとえばお医者さんはなぜ高収入か。これは
投資（勉強）に七〜八年かかって、その他に入
学金だ寄付金だつてもものすごくかかって、塾の
頃から含めれば大変なお金がかかる。それを、
お医者さんになるのが三十歳で、五十歳台でリ
タイアするとすれば、二十年かそこらで回収し
なければいけないんだから、ものすごく稼がな
いといけないわけでしょう？ あるいは弁護
士。司法試験を五回落つちこちでやつと合格して、
大きな事務所を構えてということになります
と、やはり大変。

しかし、これは職業選択の自由を支えている
原理でもある。もし似たような労働で給料が高
い職種があったらどうなりますか？ そっちに
みんな行くでしょう。供給が増えて需要が一定
だとすると値段は下がる。でも、みんなが自由
に職業を選んでいるならば、きつい仕事や大変

な仕事の給料がそれなりに高く、簡単な仕事は
給料が安い。こういうふうには均衡するわけだ。
ゆえにこれは正義である。

そして、人びとはどう思うかというと、一生
懸命勉強して付加価値の高い労働をする、社会
に役に立つ人材になる。そうすると給料が高く
なる。できればそういう仕事をしよう。僕は医
者になろう。僕は弁護士になろう。僕はビジネ
スマンになろう。僕はエンジニアになろうとか
言って、社会全体が活力を帯びてくる。人材を
開発するにはこうでなければならぬ。もし
も悪平等があれば、近代社会は窒息してしまう
わけです。これが一番目。

ところで昔の社会はこうではなかった。農民
の子は農民、商人の子は商人、武士の子は武士
になった。封建社会です。封建社会では、自分
の労働が自分の自由にならない。親の遺産、
代々の資産を前提にして仕事をやるから、報酬
はそれなりに配分されるんだけど、一人ひとりの
貢献によって配分されるという原理ではな
い。そこで不平等なんですな。

で、近代化が始まると、ああ自由が訪れた、
私は実はお百姓さんなんかやりたくないんです
と言って、都会に出てエンジニアになるとか、
近代的な職業に人口が移動する。そうすると、

報酬や待遇が、自分がどういう階層、集団に属するかという帰属の原理＝帰属主義から、自分がどういふ活動をしたかという業績原理＝業績主義に変わっていく。これは社会学の基本テーゼの一つですね。

封建社会から近代社会になって、日本でも農村人口が減り、今ではサラリーマン人口が七、八割という世界になったわけですが、そうすると、サラリーマン社会の帰属主義が強まってくる。サラリーマンが正しいのだと。フリーターは大した仕事をしていないのだから賃金は安くてもいいのだと。これが言えることですね。二番目終わり。

フリーターは現代のプロレタリアか

三番目。ではなぜ人はフリーターになるのか。フリーターは不定期雇用で自由労働者、身分の保証もないが責任もない。雇用期間が短く不安定で、相対的に賃金が低い。景気が悪くなったとすると「キミ、もう来なくていい」とか言われる。

また熟練とか専門技術のようなものがあまりない。まるでマルクスが絵に描いたようなプロレタリアアです。マルクスは、近代化が進むと必然的に単純労働が増えてプロレタリアになると言ったけれども、そうはならなかった。産業社会は高度な科学技術を前提にしているから、専門職とか管理職が要るわけ。プロレタリアは、マルクスの予想に反して、だんだん減ってしまっただけで、いまままでかフリーターが増えていくという状況がある。

企業では、単純な周辺労働がある割合で発生せざるを得ない。たとえばコンピュータ導入の初期、データ入力というパンチカードを打ち込む作業が必要になった。私もやってみただけ、すぐに打ち間違えたりなんかしてね、とても大変なんです。昔はそうだった。半日かかってプログラムが百行打てたかな、みたいな世界。今はプログラムパッケージとかあるし、そんなことは誰もしません。でも昔は、キーパンチャーという人がいて、大型コンピュータの隣に百人くらい、パチパチパチパチとずっと打っていたんですね。で、キーパンチャーを三十年契約で雇うわけにはいかないでしょう。五年したらなくなっちゃう職種なんだから。そこでとりあえず、フリーターを二か月訓練してキーパンチャーにしようかみたい企業がある。今のホームページの立ち上げみたいな仕事やう。これはとんでもないですね。そういうことで不平等社会になるわけだ。

パラサイト・シングルを先に言うと、まず若年労働力といっても二種類あり、親元に同居している二十代、三十代の人たちをパラサイト・シングルと言うわけだが、彼らは生活費を負担していない。じゃあ主にカネは何に使う？ お小遣いでしょ。可処分所得が一番ある人たちなわけだ。一人暮らしすると基礎消費、家賃とか光熱費とかにとられちゃってマルビになってしまふ。同じ雇用形態で雇われている人たちのあいだで、家庭の事情によって天国と地獄が分かれてしまうわけですね。親との関係によって本人の所得や階層帰属が決まってしまう。まるで中世ではないか。これは日本の特殊事情で、家賃が高いとかそういうこともあるし、親が子どもに甘い。この二つの、時代的要因と社会・経済的要因がミックスされて、日本独特の現象が出現しているわけだ。

さて、フリーターに類するものは昔は何だったか？ 昔、雇用常ならずという職種はやはり都会にあって、それは「職人」と呼ばれた。明治から昭和初期まで、職人は日給だった。「宵

も、先行きが見えないですね。そのうち機械化されちゃって、人間じゃなくてもできるようになるかもしれない。通産省の予測なんて大体当たらずで、システムエンジニアが三百万人不足しますとか騒いでいるので、うっかりシステムエンジニアになったりすると、もう要りませんとか言われそう。自動車の運転手だって危ないですよ。今はカーナビだけ、ドライブレナビか何かできて、長距離の大型トラックなんてみんな自動運転になっちゃうかもしれない。

パラサイト・シングルとフリーター

フリーターは現代のプロレタリアか。三番目。ではなぜ人はフリーターになるのか。フリーターは不定期雇用で自由労働者、身分の保証もないが責任もない。雇用期間が短く不安定で、相対的に賃金が低い。景気が悪くなったとすると「キミ、もう来なくていい」とか言われる。また熟練とか専門技術のようなものがあまりない。まるでマルクスが絵に描いたようなプロレタリアアです。マルクスは、近代化が進むと必然的に単純労働が増えてプロレタリアになると言ったけれども、そうはならなかった。産業社会は高度な科学技術を前提にしているから、専門職とか管理職が要るわけ。プロレタリアは、マルクスの予想に反して、だんだん減ってしまっただけで、いまままでかフリーターが増えていくという状況がある。

企業では、単純な周辺労働がある割合で発生せざるを得ない。たとえばコンピュータ導入の初期、データ入力というパンチカードを打ち込む作業が必要になった。私もやってみただけ、すぐに打ち間違えたりなんかしてね、とても大変なんです。昔はそうだった。半日かかってプログラムが百行打てたかな、みたいな世界。今はプログラムパッケージとかあるし、そんなことは誰もしません。でも昔は、キーパンチャーという人がいて、大型コンピュータの隣に百人くらい、パチパチパチパチとずっと打っていたんですね。で、キーパンチャーを三十年契約で雇うわけにはいかないでしょう。五年したらなくなっちゃう職種なんだから。そこでとりあえず、フリーターを二か月訓練してキーパンチャーにしようかみたい企業がある。今のホームページの立ち上げみたいな仕事やう。これはとんでもないですね。そういうことで不平等社会になるわけだ。

パラサイト・シングルを先に言うと、まず若年労働力といっても二種類あり、親元に同居している二十代、三十代の人たちをパラサイト・シングルと言うわけだが、彼らは生活費を負担していない。じゃあ主にカネは何に使う？ お小遣いでしょ。可処分所得が一番ある人たちなわけだ。一人暮らしすると基礎消費、家賃とか光熱費とかにとられちゃってマルビになってしまふ。同じ雇用形態で雇われている人たちのあいだで、家庭の事情によって天国と地獄が分かれてしまうわけですね。親との関係によって本人の所得や階層帰属が決まってしまう。まるで中世ではないか。これは日本の特殊事情で、家賃が高いとかそういうこともあるし、親が子どもに甘い。この二つの、時代的要因と社会・経済的要因がミックスされて、日本独特の現象が出現しているわけだ。

ティックにやられ、瀬戸物はタッパーウェアにやられ、植木屋さんは除草剤やガーデンングにやられ、大工さんはツバイフォーにやられた。そうすると残りは半端仕事になるので、給与は下がり、フリーターの水準になっていく。

それから工場労働者のうちのある部分がある部分があった。私の父は戦前、繊維会社で女工さんの募集やらマネジメントをやっていたんだけど、当時の工場は、女工さんが二千人、三千人という規模なんです。だから寄宿舎もあった。工場の依頼で勧誘のスカウトマンが田舎に行って、五人兄妹で高等小学校を卒業するとかいう十四、五歳の子の親に会って、こんな立派な工場ですと写真を見せて、お茶やお花も習えます、夜間の学校もありますよとか、田舎でぶらぶらしていてもしょうがないとか何とか言って連れてくる。そして四月に何百人、千人と入ってくる。

でも彼女たちは定着率が低い。まず夏が勝負。春に入ってきて、工場に合わなかったり先輩にいじめられたりして、お盆に里帰りするともう帰ってこないわけ。それから半年、一年、長くても三年。三年勤めればいいほうで、後輩を指導する係になり、勉強もよくできて、すっかり職も身につけてという優秀な人もいます。

当に家計の足しにというケースもあるかもしれないし、全部小遣いみたいな場合もある。

そういうふうなフリーターと似て非なるところがあるんですけど、パートというのは、家計に責任を持っている人たちのことを呼んでいる。フリーターはまだ自分で家計を構成していない人たちなんだな。

あとフリーランスというのがありますね。これは専門じゃないけど、フリーランサーというのは中世ヨーロッパで生まれたカテゴリーじゃない？ 騎士は親元で育ってそのまま身分が継承できるかというところではなくて、馬に乗ってよその土地に流れ着いて、その領主に囲われて、何か職務を手掛けたりして何年か放浪して、郷里へ戻ってきて跡取りになる。同じような現象が職人にもあった。親方について徒弟修行して、ギルドに対してマスターピースというものを出す。マスターピースが認められるとマスターというものになるんだが、即開店できるわけじゃなくて、やっぱりよその土地に行って仕事をしながら、半ば自由労働力、半ば修業という時期を経て帰ってきて親方になる。それで家を構えて結婚してみたいなライフコースが一般的だった。

何でこういうシステムがあったのかよくわか

でもたいていの人は三年もたない。平均するとレベルの低い工場は勤続半年。いい工場でも一年越えるかどうか。だから長く勤続してもらおうと、いろいろ福利厚生とかやるんだけど、みんな逃げちゃうんだな。仕事がつくて待遇が悪いから。給料を払ったってみんな食事代とか何だとかいって取り上げちゃうんだもんね。

さて、彼女たちは何だ？ フリーターではないが、雇用常ならずだな。半年、一年、その後は田舎に帰るかというところ、それは人生ですからいろいろあるわけ。だんだんお化粧がうまくなってきたと思っただけじゃなくて、道頓堀のカフェで女給さんをやっていたりとかね。

そういう人たちは、今ならフリーターになっている人たちですね。だって技術がない。繊維工場、紡錘機っていうんだけど、グルグル回っているのをずっと見ていて、糸が切れたら機械を止めてつなぐ。それだけなんだから。機械一台を一人で見ているわけじゃない。馴れてくると一人で五百台とか見る。切れたらサッと行って素早く機械を止め、糸を手早くつないでまた機械をスタートする。ちなみに私の父親は、五百台を千台にするには、駆けつけるスピードが速くなければと言っていてローラースケートを女工さんに履かせたりしたんです。そんなバカバカ

らないが、たぶんそれが社会の流動性や活力がなくなる。ですから社会にとって必要なもの、ほかに商人、僧侶、軍人、それも主に若者、単身者が、自分の身分や職業をもって移動した。これがフリーランスの起源じゃないかと思うんですよ。

フリーランスの特徴は、生産手段を自分が持っているわけです。単独で出来高で契約して生きていく。労働力を売るのはなくて、作品や商品を生産する。

そういうものは、資本主義社会の中ではどちらかというと例外的です。たとえば芸術家。とくに作品が物体として売買できる美術家みたいな人。生産手段はアトリエだとか、だいたい自分で持っている。出来高払いで中間搾取がないから、まあ画廊とかはあるけれども、基本的に自分がまるまる儲けをもらえる。

で、フリーランスというのは、企業にとつてはなかなかいい面もあるわけ。企業は強烈なディシプリン（規律訓練）を持っている。とくに日本では、企業共同体として、企業が予測可能な行動をするように従業員に求めるわけ。そうすると企業が行き詰まったり煮詰まったりした場合に、攪乱要因（次代を切り拓くちよつと変わった人間）を従業員の中に見つけることがで

しいこと誰も考えないねえ（笑）。でも少しは能力が向上したらしいけどな。

そういう工場労働者は、本社勤務の月給取りの人たちとは違った給与体系だった。で、本意に辞めてしまう。でもフリーターというのは不本意じゃなくて、お互い合意の上で次々辞めていいわけ。代わりはいくらでもいるし、ここが違うんです。それから昔は住み込みが多かった。バラサイト・シングルは親元に住み込んでいるわけでしょう。昔は原則として勤務先に住み込んだんだ。

パートとフリーランスとの違い

そして今もうひとつはパートというのがある。パートはフリーターと似ている面もある。パートの人たちは、言わば自分の家庭に住み込んでいるわけだ。そこから通える範囲のところまで職場を持つ。そして雇用常ならず。大勢そういう人がいるので給料は当然かなり低くなる。でも、基礎消費の部分は夫の扶養家族になっていたりする関係で、階層帰属は高い場合もある。だからフリーターと似ていますね。めいめいの事情はいろいろです。家計の事情は、旦那さんの働きぶりによってピンきりなんであって、本

きない。そこで社外何とかがということになるんだけど、そういう社外の人と常時付き合いがあるような企業はわりあいそういうことがやりやすい。たとえば、放送局、新聞社、出版社などは、社外の人とのネットワークが業績の大きな基盤になっていくでしょう。攪乱要因、予想外の要素を持って飛び回っているのがフリーランスで、フリーターにはこういうものはあまり期待できない。フリーターにも一人ひとり個性があるんだが、その個性に干渉したり、踏み込んだり、企業に合わせてくれとは言わない。そこに自由があるが、その個性の部分は労働の中だけでは表現できないので、私生活で表現するしかなくなる。それで私生活での個性主義と、企業での単調労働が両立している。これがフリーターの特徴だな。だからフリーランサーとは違う。フリーランサーは企業に個性を持ち込むことを期待されているわけです。（談）

橋爪大三郎（はしづめ・だいさぶろう）
1948年生まれ。社会学者。東京工業大学教授。思想、社会全般にわたる明快な理論と語りには定評がある。政治や教育問題をに對しても積極的に発言・提言を行なっている。著書「はしづめの構造主義」（講談社現代新書）、「言語ゲームと社会理論」（勁草書房）、「民主主義は最高の政治制度である」（現代書館）、「こんなに困った北朝鮮」（アタローク）など。